



第7326号

2021年8月31日(火)

逆境から立ち直る力

言の葉OFFICEかのん代表 川邊 暁美

◆五輪選手たちの感謝の言葉

いつの頃からか首相や知事、専門家の言葉などを遠くを感じるようになり、冷めた目で眺めている自分がある。コロナ禍による自粛疲れ、緊急事態宣言慣れ、ワクチン接種による気の緩みが指摘され、報道される「医療の逼迫状況」や「総力戦」呼び掛けの緊迫感も、頭では十分に理解できるのだが、希望の光が差しかけては閉ざされる繰り返しに振り回され、心身が疲れてしまっている感は否めない。

久しぶりに気分を高揚させてくれたオリンピックでも、競技を終えた選手たちが真っ先に、大会を開催してもらえたこと、関係者・ボランティアの方などへの感謝の言葉を口にするのを見て、選手たちがどれほどの逆風に耐えながらオリンピックを目指してきたのかと思うと胸が痛んだ。

◆谷真海選手の大切なもの

そして、さらなる厳しい状況下で東京パラリンピックが開幕した。パラリンピックの理念は「失われたものを数えるな、残された能力を最大限に生かせ」だという。

8年経った今でも忘れられない言葉がある。2013年の国際オリンピック総会で、2020年東京での五輪、パラリンピック開催を勝ち取ったチームジャパンの最終プレゼンテーションでのパラリンピアン・谷(旧姓・佐藤)真海選手の言葉だ。その高い完成度と場の空気を一瞬に変えた声・話し方、心を打たれたメッセージについては、かつて私も紹介したことがある。

「私がここにいるのはスポーツによって救われたからです。スポーツは私に人生で大切な価値を教えてくださいました」。冒頭のこの言葉から心をつかまれ、身を乗り出してテレビ中継画面に見入った。さらさらのストレートヘアにさわやかな笑顔の彼女がいた。陸上選手でチアリーダーでもあった19歳の彼女が突然骨肉腫を発症し、右足膝下を切断したという自身の経験を語っていく。

最も印象に残っているのは、「何より、私にとって大切なのは私が持っているものであって、私が失ったものではないということ学びました」という言葉。

◆パラリンピックの理念と競技者の姿

夢も希望も何もかも失ってしまったと絶望の淵に沈んだとき、パラアスリートとして陸上に取り組むことで、生きる力を取り戻した彼女は、その後、アテネ・北京・ロンドンのパラリンピックに出場するまでになった。東日本大震災直後には、被災した故郷の宮城県気仙沼市へも足を運び、子どもたちをスポーツの力で元気づける活動をしたという。

「大切なのは持っているものであって、失ったものではない」。パラリンピックの理念に通じる、その言葉の意味するところが、目の前で繰り広げられているパラリンピアンたちのプレーからより深い真実味を持って心に響いてくる。

東京大会のテーマには「レジリエンス(逆境から立ち直る力)」が掲げられている。谷選手は開会式で日本選手団の旗手を務めていた。彼女はトライアスロンに出場した。長いレースの最後を笑顔で締めくり、「ここまでの経験が大きな宝物」と振り返った。

コロナ禍で多くのものが失われた今、谷選手をはじめ、パラリンピアンたちが全力で競技する姿からどんなメッセージを受け取れるかは自分次第だが、それを自分自身の「逆境から立ち直る力」にしたいと思っている。
(かわべ・あけみ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003